

少し、だれかのために

手話サークル「一步の会」の高橋宏美さん(寺地団地・41歳)は、障害者も同じだと気がつきました。

何かしたいなあと思って、3年前に手話講座を受講しました。そのときの仲間と「一步の会」を作ったのです。コツコツと手話の勉強を続けています。まだまだ覚えられません。でも、楽しいですし、ろうあ者とふれあっている教えられるりしています。自分でも気がつかないうちに偏見を持っていました。障害を持つ人も同じなんです。手話をとおして、それを知ったことが収穫ですね。



少しでも役に立てれば、とボランティアの「つえの会」に鷲尾ヒデさん(黒鳥・58歳)は入りました。

体を悪くして会社を辞めたのです。広報でお年寄りの話し相手を集めていると知り、時間もあつ少しだけでも役に立てればと思ひ、ボランティアの「つえの会」に入りました。会はとても温かい雰囲気でお年寄りの仲間づくりの会を開いたり、バザーの商品を作ったりして頑張っています。実は母子家庭で、子供がようやく一人前になりました。人様のご恩に報いていきたいとも思うのです。



総合体育館前の空き地にチューリップの球根をみんなで植えました、と山崎一栄さん(鳥原・38歳)。

黒崎町はチューリップの産地なのに家庭ではあまり植えられていません。そこで皆さんから実際に球根を植えてもらい、チューリップに親しんでもらおうと「花と緑の会」で計画したわけです。農家にとっては消費拡大にもなればありがたいですね。それに、何も使われていない総合体育館前の空き地に、みんなで花を植えること自体いいことですし、町づくりに役立つのではないのでしょうか。



あ	な	と		
町	を	つ	な	く

広報

くるさき

1987

11

No. 290

高橋裕さん(板井・38歳)は献血を30回。検査してもらえ自分の健康管理に役立つことがその理由。

よく献血をするようになったのは健康を心配し始めた30歳過ぎからです。というのは、献血のとき血液や体の検査してもらえるので、健康管理に役立つと思ったからです。だから、自分のためです。結果的に人の役にも立てるのでうれしいです。今まで30回したんですが、町に友愛号がきたときのほかに、新潟の古町にある献血ルームへよく行きます。若い人がいっぱいしています。



長沢由利枝さん(鳥原・34歳)は使用済み切手やロータスクーポンを子供たちと一緒に集めています。

使用済み切手やロータスクーポンを集めています。切手はペニシリンになるのです。お父さんや文通している子供へ来る手紙からとっています。最近では切手を貼らない郵便が増えて残念。収集癖があるみたい。ロータスクーポンは買物から帰るとすぐ切ってしまいます。なかなか増えません。チリも積もれば山になるでしょう。最近では子供(宏美さん・右、いづみさん)と一緒に集めています。



私にできる最初で最後のボランティアと思ひ、献体することを決めた若林正信さん(金巻・70歳)。

他力本願という言葉の意味は、人様のおかげで己は、生かされているということです。いいことをしようと思わなくても人のためになったり、悪いことをしようと思わなくても人の迷惑になったり、それを人の「業」と言うのでしょうか。自分の器量を超えて人を助けることはできません。そんなことを考えて、私にできる最初で最後のボランティアと決め、新大医学部に献体を登録しました。



特集 / 私にできること
(2~11ページ)